目取真俊「虹の鳥」の異同

The Differences between the Initial Edition and First Edition of NIJINOTORI by Medoruma Shun.

銘苅　純一
大妻女子大学人間生活文化研究所

Junichi Mekaru
Institute of Human Culture Studies, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：目取真俊，虹の鳥，ジェンダー
Key words：Medoruma Shun, Nijinotori, Gender

抄録

本稿では、目取真俊「虹の鳥」の初出本文と初版本文の異同を調査した。その結果、2004年に『小説トリッパー』（冬号、朝日新聞社）に掲載された初出と、2007年に単行本化された『虹の鳥』（影書房）には、多くの異同が見られた。異同の総数は469箇所で、そのほとんどは初出と初版の読者層の違いによるルビの削除や、若干の加筆修正であった。しかし、特筆しべき点として、姉・仁美が米兵にレイプされるという設定が加筆されていること、仁美・マユ・1995年の少女暴行事件の被害者が重なりをもって描かれることの二点が挙げられる。これは初出の書評などで述べられた、「人間らしく」描かれる仁美が目取真の思想の変化を示唆するといった指摘への反駁によるものと推察される。すなわち、「人間らしさ」を維持した仁美に希望を託すといった安易な評価は、仁美へのレイプという加筆によって拒絶される。

0.　はじめに

目取真俊は作品の改稿にあたり，大幅な加筆修正を作品に施すことが指摘されている[1].しかし，目取真の作品群についての詳細な校異の検証は，ほとんど手つかずのままである．本稿でとりあげる「虹の鳥」についても同様に，改稿のさいの加筆が指摘されているが，詳細な検証はなされていない．このように書誌的分析が不十分な目取真の作品群については，異同を含めた書誌データの整備が必要である．

以上のことから，本稿では目取真俊「虹の鳥」の異同を資料としてまとめることを目的としている．異同調査の結果を分類・整理し，今後の方向性や課題について考察する．

1.　「虹の鳥」における異同

1.1.　調査結果の概要

本稿では目取真俊「虹の鳥」の初出本文と初版本文との異同を調査する．「虹の鳥」には，2004年に『小説トリッパー』（冬号，朝日新聞社．以下，初出と略記）に掲載された初出と，2007 年に単行本化された『虹の鳥』（影書房，以下，単行本と略記）の二種類の本文がある．これら二者間の異同を表 1 に示した．なお，今回の異同調査では，加筆・修正・削除やルビなど，異同が確認される箇所すべてについて，初出と単行本の該当箇所をそれぞれ示した．また，本文中の改行については「／」で示した．

調査の結果，「虹の鳥」の初出と単行本の間には多くの異同がみられ，総数は 469 箇所であった．今回の調査では，そのうち，ルビに関するものが 146 例，句読点に関するものが 25 例，文字表記（漢字・ひらがな・カタカナ）に関するものが 33 例，改行が 2 例あり，その他に 263 例の異同が確認できた．以下，分類について詳述する．

1.2.　ルビ

ルビに関する変化は，「その他」に次いで多い

146 例であった．さらに細かくみていくと，初出から単行本でルビが削除された変化がもっとも多く，143 例であった．逆にルビが追加されたものが 2 例，ルビが修正されたものが 1 例あった．

削除されたルビは，「太腿」「喉」「怯え」といった比較的読みやすい漢字のルビ（例えば，【表 1】，№7．以下，例については№のみを示す）であり，これは初出と単行本の読者層の違い，出版元の編集方針の違いによるものだと考えられる．この点については出版社側へのインタヴュー調査などさらなる検証が必要であろう．

1.3.　文字表記・句読点・改行

文字表記の変化 33 例のうち，初出と単行本で漢字の変更が 22 例あった．これらは「下」から「降」への変更 17 例（№22）と，「名」から「人」への変更 4 例（№54），「遣」から「使」への訂正 1 例（№110）の 3 パターンである．

また，漢字からひらがなへの変化は 7 例（№14），カタカナへの変化は 1 例（№257），逆にひらがなから漢字への変化は 2 例（№6）あり，その他に，ひらがなからカタカナへの変化が 1 例（№194）あった．

句読点の変化は 25 例あり，その内訳は読点が新たに追加されたものが 17 例（№11），読点の削除が 5 例（№89），一文中の読点の位置が変更されたものが 2 例（№180），読点から句点へと修正されたものが 1 例（№80）であった．

また，単行本で新たに改行された例が 2 例（№208）確認できた．

これら文字表記の変化は，先にあげた句読点の変化や改行と同様に，文章の読みやすさを意識した一般的な修正だと考えてよいだろう．

1.4.　その他

今回の調査でもっとも多く見られた変化は「その他」である．この変化の多くは，文章表現の変化となっている（№9）．現段階では分類が困難なものであったため，「その他」としてまとめた．今後，さらに細かい分類が可能であれば調査していく予定である．ただし，「その他」のなかには，特徴的な異同を示す例がいくつかみられる．この点については後述する．

2.　調査結果からみえてきた今後の課題

2.1.　沖縄方言と標準語

以上みてきた一般的な修正とは別に，「虹の鳥」の異同には意識的な加筆・修正と考えられる点が散見された．そのひとつはルビである．先述したように，ルビの変更の大部分は発表媒体が変更されたことに起因するものと思われるが，沖縄方言のルビが削除されている点は，注目すべきであろう．ルビが削除されたものは「部落(しま)の神人(かみんちゅ)」（№10），「だらだらするな(さんけー)」（№123），「清明祭(シーミー)」（№202），「だけど(やしが)」（№379），「泉(かー)」（№117），「あき兄(にー)」（№446）の 6 例である．

沖縄文学は標準語と沖縄方言との格闘からはじまった．例えば，沖縄文学における初の本格的小説として知られる山城正忠「九年母」（『ホトトギス』第 14 巻 11 号，1911 年）は，沖縄の言葉を「日本語」の中に織り込んだ．そのため，当時の批評家伊波月城に「ブロークン琉球語」と批判されている[2]．同じように東峰夫「オキナワの少年」（『文学界』12 月号，1971 年）は，沖縄方言のルビを打つことで「あやういところで沖縄の言葉と共通語とを結んで成功[3]」し，芥川賞を受賞した．目取真もまた，「怠け者(ふゆなー)」，「痴れ者達(ふりむんたー)」，「何(ぬー)が，我(わ)っ達(たー)徳正や見世物(みしむん)るやんな？」（「水滴」，『文学界』4 月号，1997 年）といった文体を試みている．このような文体の実践と，単行本「虹の鳥」におけるルビの削除は，逆の方向性を示してる．

だが，「内地人(ないちゃー)」（№164），「遊び人(あしばー)」（№198）の 2 例についてはルビが追加されている．これは「あしばー」，「ないちゃー」という沖縄方言での意味内容を「日本語」を通して再認識させるためだと推察されるが，目取真の他のテクスト群とあわせて詳細な検証が必要であろう．今後の課題としたい．

2.2.　都市空間の描写

「虹の鳥」では沖縄の都市空間が緻密に描写されている．

> 北中城を抜けて東海岸に向かう坂道を下る．海岸線を北上して着いたのは，中部では名の知れたステーキ・ハウスだった．（初出，p55）

> 渋滞は那覇市を出ても続いた．五八号線から右折して浦添市内を抜け，宜野湾市に向かうバイパスにでた．そこも酷い渋滞で，時計に目をやっては舌打ちを繰り返した．真栄原から三三〇号線を普天間に向かい，母親の喫茶店に着いたのは一時半頃だった．(初出，p111)

沖縄に住んでいる者には沖縄市泡瀬にある「ステーキ・ハウス」のことや，那覇から普天間までの経路が鮮明に見えてくるだろう．この緻密な都市の描写は，そこが暴力の舞台となることで沖縄に浸潤する暴力をも想起させる．

今回の異同調査ではこの都市空間描写の緻密さを維持するための修正が見られる．「山下十字路を左折して五八号線に出た」（№158）は，単行本では「右折」と修正されている．山下交差点と呼ばれはするが那覇軍港湾施設と接しており，実際はT字路である．「虹の鳥」では「山下十字路」から国道 58 号線に出て，「波の上」に向かう設定のため，「左折」では整合性がとれない．そのための修正であろう．

このように，「虹の鳥」では，沖縄という「島」ではなく，南部から北部までの都市空間を描くことに力点が置かれていると言えよう．この点についてもさらなる検証をすすめたい．

2.3.　「虹の鳥」が想定する読者

ところで，「虹の鳥」では，沖縄の地名に打たれたルビも削除されていた．単行本でルビが削除された地名は「奥武山（おうのやま）」（№10），「小禄（おろく）」（№13），「宜野湾（ぎのわん）」（№87），「国頭（くにがみ）」（№336），「真栄原（まえはら）」（№367），「読谷（よみたん）」（№455），「恩納（おんな）」（№457）の 7 例である．

沖縄方言に関するルビの削除や，地名のルビの削除，精緻さにこだわった都市の描写などを鑑みると，「虹の鳥」は沖縄の人々を読者として想定し，沖縄の人々に向かって書かれたと考えられるのではないか．そもそも，山城正忠らが「ブロークン琉球語」と批判されながらも，沖縄の言葉と「日本語」を織り交ぜた文体を使用しなければならなかったのは，中央文壇，つまり「日本人」を読者として想定していたからである．

目取真俊が「虹の鳥」で誰を読者として想定していたかについては重要な点であろう．

2.4.　「虹の鳥」における「少女」の表象

2.4.1.「仁美」のレイプ

この他にも，「虹の鳥」の異同から見えてくる重要な点がある．それは，谷口基[4]が指摘しているように米兵による姉・仁美へのレイプが単行本では新たに書き加えられていた点である（№229, 233, 373, 393）．このことは何を意味するのであろうか．

目取真俊は池澤夏樹との対談「特別対談『絶望』から始める」において，沖縄の基地反対運動が 1995 年の少女暴行事件で盛り上がったにもかかわらず，いまだに解決していない現実の中で沖縄の民衆がなぜ絶望しないで生きていられるのか，一旦徹底的に絶望したところから何かが始まるのではと述べた[5]．しかし，松木新はこの対談時の目取真の思想が，「虹の鳥」（初出）において変化したと指摘し，「この作品では，非日常の世界に浮遊しているカツヤの思想と行動の内に，この絶望の思想が濃厚に反映しており，虹の鳥という幻影に出口を求めるカツヤの心情が，ある種の寓話の世界を創造している．だが，事件から九年余経った現在，目取真俊の思想にも変化が見られることをこの作品は示している．それはカツヤの姉仁美の形象だ」と述べている[6]．初出で描かれたカツヤの姉「仁美」は，親の軍用地料を拒否し，自力で短大を出て教員免許を取得し，作中では唯一浸潤する暴力から逃れ，「人間らしさ」を維持した存在であった．父親の地代でスロットマシンに忘我し「殴られ続けた犬」を思わせる視線をおくる二人の兄と，「カツヤ，世の中は変わるよ．自分の力で生きなさいよ．あんたならできるさ」とカツヤを励ます仁美の姿と対比させながら，松木は「基地地主二万九千人，年間の地代八百億円という沖縄の現実を考えると，『自分の力で生きなさいよ』という言葉の重みは計り知れない[6]」と沖縄の現状を批判的に述べている．

だが，先述したように単行本では米兵による

姉・仁美へのレイプが書き加えられている．目取真が松木の書評を読んだかどうかは定かではないが，「目取真俊の思想にも変化が見られること」，つまり，親の軍用地料を拒否し，自力で短大を出て教員免許を取得し，作中では唯一浸潤する暴力から逃れ，「人間らしさ」を維持した仁美に希望を託すという指摘は，仁美へのレイプという加筆によって拒絶される．

松木の評に見られるのは，「虹の鳥」に描かれた浸潤する暴力に塗れているマユやカツヤ，カツヤの二人の兄，父，母の久代，そして比嘉や松田，小柄な女たちが「基地地主二万九千人，年間の地代八百億円という沖縄の現実」によってもたらされた産物であり，これらと対照的な仁美のように自力で短大に進学し「自分の力で生きる」ことこそが，そこから救済される道だとする論理である．それゆえに，仁美のように暴力から逃れて生きることができないのは自己の責任であり，かつ「年間の地代八百億円」を受け取って生活をしてしまったのだから文句を言うことはおこがましいことだと見なされる．

このようなユートピアを夢想しつつ，現実の沖縄を批判する視線に対して，目取真は拒絶を示したのではないだろうか．

2.4.2.　「少女」の繋がり

そして，「虹の鳥」におけるもうひとつの重要な加筆として，「米兵による仁美のレイプ」という記憶が，仁美と 1995 年の少女暴行事件と重なり，さらにそれがマユへと重なって描かれる点である（№229）．

このような「少女」の繋がりは，「女子高校生」を「少女」と修正したり（№82），「この一年で急速に売れてきた少女」を「この半年で急速に売れてきた少女」（№78），「民謡を現代風にアレンジして人気のある女性グループ」を「琉球民謡を現代風にアレンジして人気のある女性グループ」（№88）と修正した例が示すように，意図的に描かれたと見ることができるのではないか．

単行本で修正された「急速に売れてきた少女」とは，1995 年 1 月に「TRY ME～私を信じて～」が大ヒットした安室奈美恵のことであり，「琉球民謡を現代風にアレンジして人気のある女性グループ」は，2 人組み女性ユニットのティンクティンクのことであろう．安室奈美恵は「アムラー」という社会現象が話題ともなり，安室のバックダンスを務めたスーパーモンキーズは MAX としてデヴュー, 1996 年には SPEED, その他に DA PUMP, Folder, 知念里奈などの沖縄出身アイドルが全国的に認知され，そのいずれもが「沖縄アクターズスクール」の出身であった．このような沖縄出身アイドルの活躍は様々なメディアによって増幅され，政治性を排除された「商品化」できる「オキナワの少女」を作り上げた[7]．さらに沖縄アクターズスクール校長のマキノ正幸は，沖縄出身アイドルたちの活躍が，これまでの沖縄のネガティブなイメージを払拭し，沖縄のイメージをアップするものだとして次のように述べている．

> 沖縄の子供たちはとてもいい環境のなかにいると思う．/「基地問題もあるし，失業率も高いのに，どこがいい環境なんだ」と，反論する人もいるだろう．/けれでも，いま，沖縄の子供たちは日本中から注目されている．とくにエンタテイメントの世界では，沖縄出身というだけでデビューしやすくなっている．沖縄のネガティブなイメージが変わったと言っていいだろう．/ではイメージを変えたのは誰か．沖縄の政治家や経済人，あるいは基地反対の市民運動家が沖縄のイメージアップに貢献しただろうか．答えはノーだ．沖縄アクターズスクールの卒業生たちが，外に飛び出して思い切り元気を発散し，基地問題や，戦争の傷跡といった負のイメージをひっくり返したのだ[8]

山入端太一は，基地問題や沖縄戦の記憶を「ネガティブなイメージ」とするマキノと，1996 年 8 月に設立された「沖縄米軍基地所在市町村に関する懇談会」（通称，島田懇）とが密接に結びついており，マキノが自著の中で島田懇の座長島田晴雄や元沖縄担当補佐官岡本行夫らとともに自らのプラン（沖縄アクターズスクールのショーや，テーマパークの建造）をポジティブ・キャンペーンとして打ち出していることを指摘している．さらに，自らの身体が市場価値をもつことを自覚していた「オキナワの少女」にとっても，この戦略の上に立たされていることに無自覚であったと述べている[9]．

少女暴行事件を背景として設定された「虹の鳥」

では，商品化される「オキナワの少女」，米軍基地による「犠牲」として掲げられた「1995 年の少女」，そしてその対極に位置し，誰からも省みられることのない「マユ」への暴力が描かれ，さらにその「マユ」と「カツヤ」が双頭の獣のように描かれている．このような点から考えられるのは，戦争体験を当事者ではない世代がどのように語り継ぐことが可能かを模索した表現者として評価されている目取真が，「虹の鳥」において，世代の隔たりではなく，ジェンダーによる隔たりをいかに分有していくかに挑んだ作品として見直すべきであろう．

3.　おわりに

以上のように，「虹の鳥」は，「無自覚日本人炙り出す[10]」，「告発の書[11]」，「この現実こそ見据えてほしいという作者の叫び声が聞こえてくるようだ[12]」，「虹の鳥という幻影に出口を求める[6]」といった，カツヤとマユがヤンバルの森に「逃避」していくとする評などとはどこか違う位相にあるように思われる．むしろ「虹の鳥」はひとびとを「純粋な被害者」像によってふるいにかけていく言説そのものへの苛立ちや拒否感が中心になっており，暴力に蝕まれた姿を「日本人」へと問うことよりも，むしろ「沖縄」へとベクトルが向かっているのではないだろうか．

このような初出との異同からみえる目取真の意識をとおして「虹の鳥」というテクストをさらに詳しく検討する必要があるだろう．

引用文献

[1] スーザン・ブーテレイ．“目取真俊の世界”．影書房，2011，11p.
[2] 伊波月城．閑是非．沖縄毎日新聞．1911 年 6 月 28 日付．
[3]仲程昌徳．“近代沖縄文学の展開”．三一書房，1981，p.　54-68
[4] 谷口基. 不可視の暴力を撃つために――目取真俊「虹の鳥」論．立教大学日本文学．2006，第 97 号，p.　188-196.
[5] 目取真俊ほか. “特別対談「絶望」から始める”．文学界．1997，9 月号，p.　174-189.
[6] 松木新．“文芸時評「虹の鳥」のことなど”．民主文学．2005，3 月号，p.　162-167.
[7]マキノ正幸．“才能”．講談社，1998，193p.
[8]本浜秀彦．オキナワの少女」というアイドルたち　安室奈美恵と汎アジア的身体．アジア遊学．2004，№66，p.　41-48.
[9]山入端太一．沖縄アクターズスクール Cocco －90 年代後半の表象されるオキナワとその背景－．地域文化論叢．2010，p.　23-35.
[10] 吉田敏浩．無自覚日本人炙り出す．西日本新聞．2006 年 8 月 13 日付．
[11] 新文化．2006 年 7 月 13 日付．
[12] 奥村修司. 暴力と憎しみで沖縄の現実を描く. 文学界．2006，9 月号，p.　242-244.

表1.「虹の鳥」における異同

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
1	産毛（うぶげ）	37	上 6	産毛	3	4
2	U 字形のポール	37	上 24	逆 U 字形のポール	4	5
3	鳳凰木（ほうおうぼく）	37	上 26	鳳凰木	4	7
4	三十代半ばくらいだった。どこかうろたえたような表情は、	37	下 23	三十代半ばくらいだった。たいていの男が、	5	6
5	たいていの男がみせる、思っていたよりもマユが幼く見え、顔立ちも整っていることにほくそ笑む表情とは、かなり違っている。	37	下 24	たいていの男が、思っていたよりもマユが幼く見え、顔立ちも整っていることにほくそ笑むような表情を見せる。しかし、男はどこかうろたえたような表情を浮かべている。	5	6
6	おろしたてのような紺のスラックス	37	下 26	下し立てらしい紺のスラックス	5	8

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
7	太腿（ふともも）	38	上 10	太腿	5	15
8	男は宙に浮いた手を太腿（ふともも）のあたりでこすり	38	上 10	男は宙に浮いた手を太腿の横でこすり	5	14
9	何の反応も示さなかった。	38	下 9	何の反応も示さない。	6	16
10	奥武山（おうのやま）公園	38	下 12	奥武山公園	7	2
11	どれくらいの軍用地料が落ちるんだろうかと思った。	38	下 22	どれくらいの軍用地料が落ちるんだろうか、と思った。	7	8
12	それを聞いて羨ましさよりも	38	下 25	それを聞いて、羨ましさよりも	7	11
13	小禄（おろく）	39	上 11	小禄	8	3
14	その後に渡された女がマユだった。	39	下 11	そのあとに渡された女がマユだった。	9	5
15	いつも伏せられた目	39	下 17	いつも伏せられている目	9	8
16	すえたような臭いがこもっていた。	40	上 5	すえたような臭いがこもっている。	10	2
17	体力が回復するはずはなかったが、	40	上 6	体力が回復するはずはないが、	10	3
18	どうしてホテルではなくアパートに	40	上 10	どうしてホテルではなく、アパートに	10	6
19	比嘉から指示が出ていた。	40	上 17	比嘉からそう指示が出ていた。	10	10
20	それでも道路はかなり混んでいた。	40	下 14	それでも道路はかなり混んでいる。	11	11
21	追い越してからバックミラーを見ると、	40	下 16	追い越してからバックミラーを見る。	11	12
22	助手席から下りたマユが公衆電話に入るのが見えた。	40	下 17	助手席から降りたマユが公衆電話に入るのが見えた。	11	13
23	助手席に置いてあった携帯電話が鳴るのは、ほとんど同時だった。	40	下 18	助手席に置いてあった携帯電話が鳴るのと、ほとんど同時だった。	11	14
24	苛立（いらだ）ち	41	上 14	苛立ち	12	15
25	良い対処法が思い浮かばなかった。	41	下 2	良い対処法が思い浮かばない。	13	8
26	陽炎（かげろう）	41	下 14	陽炎	13	16
27	立ち眩（くら）み	41	下 15	立ち眩み	14	1
28	瞼（まぶた）	41	下 15	瞼	14	1
29	携帯電話の電源を切ってその横に置いた。	42	上 8	携帯電話の電源を切ってその横に置く。	14	14
30	キッチンや女の部屋に刃物は置いてなかったが、	42	上 18	キッチンに刃物は置いてなかったが、	15	6
31	ジーンズとＴシャツを脱がせたとき、	42	下 20	マユのジーンズとＴシャツを脱がせたとき、	16	8
32	開けると同時に一気に事を進めなければと思った。	42	下 22	開けると同時に一気に事を進めなければ、と思った。	16	10
33	マユが小さな声を漏らした。	42	下 23	マユが小さな声を漏らす。	16	10
34	喚（わめ）き	43	上 4	喚き	16	16
35	ベッドを下りようとする。	43	上 4	ベッドを降りようとする。	16	16
36	掠（かす）れ声	43	上 9	掠れ声	17	3
37	萎（しな）びた性器	43	上 13	萎びた性器	17	5
38	肩胛骨（けんこうこつ）	43	下 18	肩胛骨	18	12
39	呻（うめ）き声	44	上 1	呻き声	19	2
40	呆気（あっけ）	44	上 17	呆気	19	14
41	湯沸かし器の着火する音が聞こえた。	44	下 18	湯沸かし器の着火する音が聞こえる。	20	15
42	一階	44	下 24	他の階	21	3

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
43	怯（おび）えきった	45	上 1	怯えきった	21	6
44	喘（あえ）いでいる男	45	上 12	喘いでいる男	21	14
45	尾骶骨（びていこつ）	45	上 20	尾てい骨	22	3
46	尾骶骨（びていこつ）	45	上 20	尾てい骨	22	3
47	マユは抵抗しないで床に座り込む男を見ている。	45	上 20	マユは抵抗しないで、床に座り込む男を見ている。	22	7
48	自分の部屋に戻るとカメラを机の上に置き、	45	下 8	自分の部屋に戻ってカメラを机の上に置き、	22	15
49	パッケージを破っていると、	45	下 9	パッケージを破りながら部屋を出ると、	22	16
50	飛沫（しぶき）	45	下 14	飛沫	23	3
51	男を見下ろすマユの目つきの鋭さに、	45	下 25	男を見下ろすマユの目つきに、	23	12
52	マユの方を向こうともがいた。	46	上 1	マユの方を向こうともがく。	23	13
53	部屋からバスタオルも取ってきて浴室に戻る。	46	上 24	部屋からバスタオルをとってきて浴室に戻る。	24	15
54	何名も知っていた。	46	下 10	何人も知っていた。	25	6
55	鋭い 嘴（くちばし）	46	下 16	鋭い嘴	25	10
56	痙攣（けいれん）	47	下 5	痙攣	27	6
57	しばらく体を冷やしてから下着をつけ、	48	上 20	しばらく体を冷やしてから着替えると、	29	3
58	自分を嘲笑（あざわら）った。	48	下 1	自分を嘲笑った。	29	7
59	暴力団のグループが二十歳前後の男をラブホテルに連れ込み、	48	下 13	暴力団のグループが、二十歳前後の男をラブホテルに連れ込み、	29	16
60	痩せた鳥が弱々しく羽を広げているようにしか見えなかった。	49	上 11	痩せた鳥が弱々しく羽を広げている。	30	15
61	襟首を摑（つか）んで	49	下 3	襟首を摑んで	31	13
62	玄関に下りると、	49	下 4	玄関に降りると、	31	14
63	販売カーが流すアニメの歌が聞こえる。	49	下 11	販売車が流すアニメの歌が聞こえる。	32	2
64	そう言ったとき、初めて男が口をきいた。	49	下 16	鍵を差し込もうとしていた男が顔を上げる。	32	6
65	男がなかなか鍵を差し込めないのを、カツヤは鼻で笑った。	50	上 1	手が震えてなかなか鍵を差し込めないのを、カツヤは鼻で笑った。	32	15
66	洗剤を入れてスイッチを入れた。	50	上 6	洗剤を入れてスイッチを入れる。	33	4
67	机の引き出しを開ける。	50	上 8	机の引き出しを開けた。	33	5
68	その上に名刺を置いて閉めた。	50	上 11	その上に名刺を置く。	33	6
69	ベッドに仰向けになると、	50	上 13	引き出しを閉めてベッドに仰向けになると、	33	8
70	ベッドから下り、	50	下 3	ベッドから降り、	34	3
71	中途半端な眠りはかえって疲れを増しただけだった。／比嘉に写真を渡すのは水曜日と土曜日の週二回だった。	50	下 4	中途半端な眠りはかえって疲れを増しただけだった。ベランダに出て洗濯物を干すときも体がだるくてならなかった。／比嘉に写真を渡すのは水曜日と土曜日の週二回だった。	34	4
72	マユの体調が悪いこともあって、	50	下 7	マユの体調が悪いこともあり、	34	7
73	四人の写真しか撮れていなかった。	50	下 8	四人の写真しか撮れていない。	34	7
74	アーケード側の窓を背にして立った。	51	上 11	アーケード側の窓を背にして立つ。	35	11
75	賭けゲームに勝っていて少しでも比嘉の機嫌がいいことを願いながら、	51	上 14	賭けゲームに勝っていて、少しでも比嘉の機嫌がいいことを願いながら、	35	12
76	女が恐れたのは、竪琴を壊すことではなく自分だった、と思い、	51	下 19	女が恐れたのは、竪琴を壊すことではなく自分だったと思い、	37	3

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
77	窓の外を見た。	51	下 21	窓の外を見る。	37	3
78	この一年で急速に売れてきた少女とマユは、	51	下 24	この半年で急速に売れてきた少女とマユは、	37	5
79	今まで何名もそういう女たちを見てきた。	52	上 7	今まで何人もそういう女たちを見てきた。	37	12
80	ダメだ、カツヤはすぐに心の動きを止めた。	52	上 11	ダメだ。カツヤはすぐに心の動きを止めた。	37	16
81	滑って散った写真がカツヤの腿（もも）に落ち、	52	下 10	滑って散った写真がカツヤの腿に落ち、	39	1
82	比嘉は、女子高校生がコーヒーを運んでくるのに気づくと、	52	下 18	比嘉は、少女がコーヒーを運んでくるのに気づくと、	39	7
83	カツヤが視線を向けると、女たちはあわてて話を再開する。	53	上 4	比嘉が視線を向けると、女たちはあわてて話を再開する。	39	16
84	フェンスに沿って白や濃いピンク色の夾竹桃の花が咲いている。	53	下 12	フェンスに沿って濃いピンク色の夾竹桃の花が咲いている。	41	8
85	兵站（へいたん）部隊の基地	53	下 15	兵站部隊の基地	41	10
86	そういう考えも浮かんだが、比嘉の怒りを恐れて、結局、話を切り出せなかった。	53	下 26	そういう考えも浮かんだが、結局、話を切り出せなかった。	42	2
87	宜野湾（ぎのわん）	54	上 2	宜野湾	42	3
88	民謡を現代風にアレンジして人気のある女性グループの歌が流れ、	54	下 7	琉球民謡を現代風にアレンジして人気のある女性グループの歌が流れ、	43	8
89	語尾の震えが、三叉路に架かる歩道橋に反響し、	54	下 11	語尾の震えが三叉路に架かる歩道橋に反響し、	43	11
90	小学生の少女が、三名の米兵に車で拉致（らち）され暴行を受けた、という記事を目にしたとき、	54	下 14	小学生の少女が、三人の米兵に車で拉致され暴行を受けた。その記事を目にしたとき、	43	13
91	拉致（らち）	54	下 14	拉致	43	13
92	この事件には肉体的な不快感さえ生じるほどの怒りを覚え、そういう自分が意外だった。	54	下 18	この事件には肉体的な不快感さえ生じるほどの怒りを覚えた。	43	15
93	砂浜に押さえつけられ、泣き叫ぶ少女の姿が、小学生時代の姉の姿に変わる。見ず知らずの少女のことなのに、なぜそういう想像をしたのかは分らない。ただ、もし子どもの頃の姉が同じ目に遭ったらと考えると、刃渡りの長いナイフで米兵たちの内臓をえぐってやりたい衝動を覚えた。	54	下 19	砂浜に押さえつけられ、泣き叫ぶ少女の姿が目に浮かび、覆い被さって体を動かしている米兵の脇腹を、刃渡りの長いナイフでえぐる自分の姿を思い描いた。	43	16
94	いつもは米軍の事件や事故に目敏く騒ぎ立てる革新団体が、抗議行動を起こしているように見えないのが不思議だった。	54	下 25	いつもは米軍の事件や事故に目敏く騒ぎ立てる革新団体が、事件から数日経っているのに抗議行動をおこしているように見えないのが不思議だった。	44	3
95	しばらくして、新聞やテレビが事件のことを頻繁に取り上げるようになってから、	54	下 26	その後、新聞やテレビが事件のことを頻繁に取り上げるようになってから、	44	4
96	目の前を通るデモがどういう団体のものかは分らなかった。赤旗が一本も立っていないことから、政党や労働組合とは関係ない普通の主婦たちが中心になっているのだろうと推測した。	55	上 5	目の前を通るデモがどういう団体のものかは分らなかったが、歩いている人たちの様子を見て、普通の主婦たちが中心になっているのだろうと推測した。	44	7
97	一瞥（いちべつ）	55	上 22	一瞥	45	2
98	星が瞬き始めた空は緑がかった青に澄みわたり、	55	下 3	星が瞬き始めた空は緑がかった青に澄み、	45	8
99	木　麻黄（もくまおう）	55	下 5	木麻黄	45	9

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
100	四人がけのテーブルに比嘉とカツヤは向い合って座った。比嘉はメニューを眺め、	55	下 9	四人がけのテーブルに比嘉とカツヤは向い合って座った。アメリカ人はラフな格好で来ているのがほとんどだったが、それでもカツヤは T シャツ姿が少し気になった。比嘉はメニューを眺め、	45	12
101	蠟燭（ろうそく）	55	下 11	蠟燭	45	14
102	椅子にもたれて火を眺めている比嘉に気を遣いながら、	55	下 13	椅子にもたれて火を見つめている比嘉に気を遣いながら、	45	15
103	心を和（なご）ませた	55	下 22	心を和ませた	46	5
104	客の半分以上は米兵の家族だった。	56	上 2	客の半分以上はアメリカ人の家族だった。	46	9
105	膨（ふく）らんだ	56	上 24	膨らんだ	47	8
106	灰皿がないのに気づいてテーブルに置いた。	56	下 10	灰皿がないのに気づいてテーブルに置く。	48	1
107	怯（おび）え	56	下 12	怯え	48	2
108	写真の入った封筒を男の前に差し出した。	56	下 20	写真の入った封筒を男の前に差し出す。	48	8
109	男は一枚一枚確かめている。表情をとりつくろっているが、	56	下 21	男は一枚一枚確かめている。メモ用紙を開いて見て、表情をとりつくろっているが、	48	9
110	ストローも遣わずにコーヒーを飲み、	57	上 9	ストローも使わずにコーヒーを飲み、	49	5
111	写真を封筒に入れようとして、	57	上 10	写真とメモを封筒に入れようとして、	49	5
112	出口に向かった。	57	上 17	出口に向かう。	49	10
113	カツヤは、よろしく、と男に会釈してテーブルを離れた。	57	上 18	カツヤは男に会釈してテーブルを離れた。	49	10
114	五、六名ずついて、割と繁盛していた。	57	下 1	五、六名ずついて、けっこう繁盛していた。	50	1
115	比嘉の話がすむまで待つようにしていた。	57	下 5	比嘉の話がすむまでまつようにしている。	50	4
116	クスリの売り買いに関することだろうと察しはついていたが、	57	下 8	クスリの売り買いに関することだろうと察しはついたが、	50	6
117	帰りのショート･ホームルームが終わり、裏門から出て森に向かうときには、恐怖心で腹痛が起こり、	58	上 12	帰りのショート･ホームルームが終わって校門を出たときには、恐怖心で腹痛が起こり、	51	11
118	部落（しま）の神人（かみんちゅ）	58	上 20	部落の神人	51	16
119	五クラス四名ずつ二十名が二列に並ばされた。	58	下 5	五クラス五名ずつ二十五名が二列に並ばされた。	52	8
120	流行（はや）っていた	58	下 13	流行っていた	52	14
121	痩身の体は一見ひ弱にさえ見える。	58	下 14	痩身の体は一見ひ弱にさえ見えた。	52	14
122	呻（うめ）き声	59	上 6	呻き声	53	10
123	だらだらするな（さんけー）	59	上 10	だらだらするな	53	14
124	鳩尾（みぞおち）	59	下 8	鳩尾	54	16
125	喚（わめ）きながら	59	下 10	喚きながら	55	1
126	蹴りつけた。	59	下 11	蹴りつける。	55	1
127	震えが酷（ひど）くて	59	下 13	震えが酷くて	55	3
128	喘（あえ）いだ	59	下 20	喘いだ	55	8
129	自分が避けなければ、	59	下 25	自分が避けなくても、	55	12
130	比嘉ならやっただろう、という推測は、その	59	下 26	比嘉ならやっただろう、という推測はその	55	12

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
	後、			後、		
131	五時を過ぎて準備室から教師がいなくなると、人気のなくなるところだった。	60	上 20	五時を過ぎて準備室から教師がいなくなると人気のなくなるところだった。	56	11
132	庇（ひさし）に下りた。	60	下 16	庇に降りた。	57	9
133	急いで窓を越えて庇に下りると、	60	下 17	急いで窓を越えて庇に降りると、	57	10
134	最後に下りた	60	下 18	最後に降りた	57	11
135	比嘉は庇の端に歩いていく。	60	下 18	比嘉が庇の端に歩いていく。	57	11
136	太腿（ふともも）	61	上 26	太腿	59	1
137	喉（のど）	61	下 11	喉	59	9
138	救われたような気持ちが湧いて涙があふれた。	61	下 23	救われたような気持ちで涙があふれた。	60	1
139	教師の目が届く範囲はたかが知れている。	62	上 9	教師の目が届く範囲は知れている。	60	15
140	次は庇から落とされるくらいではすまなかった。	62	上 19	次は庇から落とされるくらいではすまない。	60	16
141	その頃のことを思い出すといつもの自嘲が込み上げてくる。	62	下 14	その頃のことを思い出すと、自嘲が込み上げてくる。	61	16
142	アパートの駐車場	63	上 22	マンションの駐車場	63	7
143	とにかく比嘉にばれないようにしなければと思った。／ベッドに仰向けになると、	63	下 18	とにかく比嘉にばれないようにしなければと思った。／ベランダに出て生乾きの洗濯物を取り込み、ベッドに仰向けになると、	64	9
144	見た目には目立った変化が表れるわけではなかった。	64	上 3	見た目には目立った変化が表れるわけではない。	64	16
145	嘲（あざけ）る	64	上 9	嘲る	65	9
146	明日までには返却しなければならないので最後まで見ようとしたが、	64	下 1	明日中に返却しなければならないので最後まで見ようとしたが、	65	15
147	しばらくベッドに横たわって、	64	下 14	しばらくベッドに横たわり、	66	10
148	半時間ほど寝てからベッドを下り、	64	下 15	半時間ほど寝直してからベッドを降り、	66	11
149	疎（うと）ましかった。	64	下 21	疎ましかった。	66	15
150	ベッドを下りるまで	65	上 4	ベッドを降りるまで	67	5
151	苛々（いらいら）	65	上 7	苛々	67	7
152	言葉自体を失っているような寒々とした印象があった。	65	下 14	言葉自体を失いかけているような寒々とした印象があった。	68	13
153	前日の行動が意外で、信じられなかった。	65	下 17	前日の行動が意外だった。	68	15
154	痩せた頬や首筋に弱い影を作る。	65	下 25	脇腹や首筋に弱い影を作る。	69	4
155	マユは座卓に置いてあったサングラスを取り、	66	上 10	マユは折り畳み式のテーブルに置いてあったサングラスを取り、	69	11
156	T シャツの襟元にかけた。	66	上 11	T シャツの襟元にかける。	69	11
157	うんざりしながら冷蔵庫にジュースを戻し、	66	上 14	うんざりしながらジュースを冷蔵庫に戻し、	69	14
158	山下十字路を左折して五八号線に出た。	66	上 16	山下十字路を右折して五八号線に出た。	69	15
159	マユを助手席から下ろした。	66	上 18	マユを助手席から降ろした。	69	16
160	ほとんど水が出たことのない噴水のまわりの広場で、	66	上 21	ほとんど水が出たことのない噴水が中央にある広場で、	70	2
161	苛立（いらだ）っていた。	66	下 6	苛立っていた。	70	10
162	平日のこの時刻に電話をかけてくるのは観光客や学生が多く、	66	下 16	平日のこの時刻に電話をかけてくるのは観光客や学生、無職の若者が多く、	71	2
163	産毛（うぶげ）	66	下 23	産毛	71	7

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
164	内地人	67	上 13	内地（ないちゃー）人	72	3
165	携帯に電話を入れるようにマユに言った。	67	上 24	携帯電話に連絡を入れるようにマユに言った。	72	10
166	マユは返事もしないでドアを開けて出ていく。	67	上 25	マユは返事をしないでドアを開けて出ていく。	72	11
167	近づいてくるマユを見て驚きの表情を浮かべる。	67	下 5	近づいてくるマユを見て驚きの表情を浮かべた。	72	16
168	周囲への警戒心は消えていた。	67	下 9	周囲への警戒心は消えている。	73	2
169	漁（あさ）っている	67	下 11	漁っている	73	4
170	どういう職業なのか判断しにくかった。	67	下 12	どういう職業なのか判断しにくい。	73	4
171	酷（ひど）かった	68	上 15	酷かった	74	9
172	起こる結果は同じだったかもしれないが。	68	下 11	起こる結果は同じだったかもしれない。	75	9
173	嬲（なぶ）らせた	68	下 15	嬲らせた	75	12
174	ハンカチに一つ包みの小石	68	下 15	ハンカチに一包みの小石	75	12
175	犯人を割り出すことができないままうやむやになってしまった。	68	下 26	犯人を割り出すことができないまま、うやむやになってしまった。	76	3
176	なぜか怒りさえ込み上げてくる。	70	上 3	怒りさえ込み上げた。	78	8
177	怯（おび）えきった	70	上 5	怯えきった	78	10
178	痣（あざ）	70	上 19	痣	79	5
179	喉（のど）	70	上 20	喉	79	6
180	カツヤは鳶色（とびいろ）の瞳の奥に、別の生き物が潜んでいて自分を見つめているようだった前日のことを思いだした。	70	下 11	鳶色の瞳の奥に別の生き物が潜んでいて自分を見つめているようだった前日のことを、カツヤは思い出した。	80	3
181	鳶色（とびいろ）	70	下 11	鳶色	80	3
182	マユは力無く首を左右に振ってから、目を開いた。	70	下 21	マユを気だるそうに体を起こすと、ゆっくりと目を開いた。	80	9
183	彷徨（さまよ）う	71	上 17	彷徨う	81	9
184	鳩尾（みぞおち）	71	上 19	鳩尾	81	11
185	体を折って喘（あえ）ぐマユをドアに突き飛ばし、カッターナイフを拾い車外に出た。	71	上 19	体を折って喘ぐマユから目を逸らさず、カッターナイフを拾い車外に出た。	81	11
186	喘（あえ）ぐ	71	上 19	喘ぐ	81	11
187	どうしようもなかった。	71	下 11	どうしようもない。	82	9
188	あわてて中に入ってドアを閉めたが、覗き穴から見ているのは間違いなかった。	71	下 11	あわてて中に入ってドアを閉める。覗き穴から見ているのは間違いなかった。	82	10
189	鬱陶（うっとう）しく	71	下 14	鬱陶しく	82	11
190	黒いビニールのゴミ袋を縦に割いて紐をつくり、マユを後ろ手に縛る。	72	上 21	黒いビニールのゴミ袋で紐を作り、マユを後ろ手に縛った。	84	2
191	薄く開いた目の奥には何の気配もなかった。	72	上 25	薄く開いた目の奥には何の気配もない。	84	5
192	この数日、	73	上 12	この二日間、	85	15
193	事件がその後どうなっているのか分らなかった。	73	上 13	米兵に暴行された少女の事件がその後どうなっているのか分らなかった。	85	16
194	がらがら	73	上 18	ガラガラ	86	3

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
195	高校を中退してアルバイトで働き始めて二年以上続いている。	73	上 19	高校を中退し、アルバイトで働き始めて二年以上続いている。	86	4
196	仕方なく当時ベトナム戦争の景気で沸いていたコザに移り、	74	上 8	仕方なく、当時ベトナム戦争の景気で沸いていたコザに移り、	88	2
197	アメリカー達	74	上 10	アメリカーたち	88	3
198	遊び人	74	上 15	遊び人（あしばー）	88	7
199	結婚して十年近くは、	74	下 4	結婚して十五年程は、	89	1
200	女の子は叱られ慣れているのか、べそをかくこともなく、母親の膝に頭を載せて甘えている。	76	下 13	女の子は叱られ慣れているのか、母親の膝に頭を載せて甘え始める。	93	16
201	カツヤと兄たちの間には、	77	上 6	カツヤと兄姉たちの間には、	94	15
202	清明祭（シーミー）	77	下 5	清明祭	95	15
203	カツヤが小学六年生のとき	77	下 11	カツヤが小学五年生のとき	96	4
204	疚（やま）しさ	78	上 11	疚しさ	97	7
205	テレビを見ている久代に、カツヤは言った。	78	上 17	テレビを見ている久代にカツヤは言った。	97	12
206	兄たちに無造作に金を渡す母や父の姿を目にするたびに、	78	下 1	兄たちに無造作に金を渡す父の姿を目にするたびに、	98	1
207	三歳上の仁美だった。小学校に入学すると、いつも姉に手を引かれて登校していた。休み時間にはカツヤの教室に回ってきて世話をするくらい、姉はカツヤを可愛がっていた。特に祝い事でもないのに、	78	下 7	三歳上の仁美だった。仁美は顔も性格も母親に似ていて、気が強く、はっきりと物を言った。カツヤに対してもきつくあたることが多かったが、それは自分がカツヤの面倒を見なければ、という思いの現れだった。小学校に入学すると、カツヤは姉に手を引かれて登校した。休み時間にはカツヤの教室に回ってきて世話をするくらい、仁美はカツヤを可愛がっていた。／特に祝い事でもないのに、	98	6
208	姉はカツヤを可愛がっていた。特に祝い事でもないのに、	78	下 10	仁美はカツヤを可愛がっていた。／特に祝い事でもないのに、	98	9
209	スロットマシン	79	上 2	スラグマシン	99	6
210	目が眩（くら）んで	79	上 20	目が眩んで	100	3
211	帽子をかぶってイヤホーンをつけた男が五名歩道橋の上にいて、	79	下 5	帽子をかぶってイヤホーンをつけた男が五人歩道橋の上にいて、	100	11
212	隣の男に何かささやいた。	79	下 7	隣の男に何かささやく。	100	12
213	三叉路から基地内に広がっていく。	79	下 20	三叉路から基地の方へ広がっていく。	101	5
214	労働組合が中心となったデモだというのが分かった。	79	下 23	小中学校や高校の教師たちのデモだと分かった。	101	8
215	歩道橋の上の私服刑事たちが、	82	上 3	歩道橋の上の男たちが、	101	12
216	無線でやりとりしている。沖縄の少女がアメリカーにやられても、こんな仕事をやってるか、と思い、カツヤは、犬が、と吐き捨てた。その言葉が聞こえたのか、私服刑事の一人がカツヤを見た。さっきからカツヤを見ていた男だった。威嚇するようににらむ四十歳前後の刑事を鼻で笑うと、カツヤにカメラを向ける。撮りたければ撮ればいい、とカツヤは道路に視線を移した。	82	上 3	無線でやりとりしている。男の一人がカツヤをしきりに見る。その目の光や表情、全身から漂う雰囲気から警察だと分かった。犬どもが、と唾を吐き捨て、カツヤは道路に視線を移した。	101	12
217	鉄パイプがあれば後頭部を殴って歩道橋から突き落としてやりたかった。	82	上 12	鉄パイプがあれば殴って歩道橋から突き落としてやりたかった。	101	16
218	しばらくデモを眺め、私服刑事たちの方にわざとらしく唾を吐き捨てて、車に戻ろうと	82	上 14	しばらくデモを眺め、車に戻ろうと階段の方まで来たとき、	102	2

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
	階段の方まで来たとき、					
219	と思った。	82	上 21	とカツヤは思った。	102	6
220	若い頃の父は	82	上 26	当時の父は	102	10
221	そういう父からコザ暴動の話を子どもの頃何度か聞かされた。	82	下 1	そういう父からコザ暴動の話を子どもの頃に何度も聞かされた。	102	10
222	コザの中の町の酒場で飲んでいた父も、	82	下 3	コザの中の町の酒場で飲んでいた父は、	102	12
223	暴動に参加していた。	82	下 4	暴動に参加した。	102	13
224	煽（あお）られる	82	下 8	煽られる	102	15
225	その話を聞くとカツヤは、子ども心に羨ましくてならなかった。米軍の車に火をつける若い父の姿や、	82	下 12	その話を聞くとカツヤは、米軍の車に火をつける若い父の姿や、	103	2
226	そう自慢げに言う父に、妬ましさを感じた。そういう出来事に巡りあえるのが滅多にないことだというのは、子どもでも分かった。	82	下 15	そう自慢げに言う父の言葉を聞いて、そういう出来事に巡りあえるのが滅多にないことだというのは、子ども心に分った。	103	4
227	二千名	83	上 3	千名以上	103	14
228	足早に過ぎていくデモ隊の中には、	83	上 6	足早に歩道橋の下を過ぎていくデモ隊の中には、	103	16
229	白々しさとやりきれなさが募ってくる。／これだけの人がいても、基地を脅かすことはできはしないのだ。軍用地料の恩恵を受けて生きてきた自分がそう考えるのは、滑稽でしかないと自覚していた。それでも、米兵に小学生が暴行されても、沖縄人はだらだら歩くしかないのか、と思い、居たたまれないような屈辱感が込み上げてくる。デモ隊の先頭は、	83	上 12	白々しさとやりきれなさが募ってくる。／ふいに夜の砂浜に仰向けにされ、三名の米兵に手足を押さえられている少女の姿が目に浮かんだ。顔のほとんどを覆う黒い大きな手で口をふさがれた少女の目が、公園でカツヤを見ていた小学生の姉の目に変わる。全身に汗が噴き出す。見開かれた目から流れ落ちるものが、カツヤの胸をえぐる。見つめる目はいつの間にかマユの目に変わっている。体の奥にねじ込まれる石の感触に、カツヤは深く息を吐き、これ以上考えるな、と自分に言い聞かせた。／デモ隊の先頭は、	104	4
230	火炎瓶を投げながら機動隊に向かっていくヘルメット姿の学生たちを映した記録映像をテレビで見た。逃げ遅れて道路に倒れ込んだ機動隊員を学生が角材で滅多打ちにしたり、火炎瓶の直撃を受けて火だるまになった機動隊員の映像を見るたびに、その時代に二十歳を迎えたかった、とカツヤは思った。	83	上 22	火炎瓶の直撃を受けて火だるまになった機動隊員の映像を目にして、部屋にいた仲間たちが手を打って喜んだ。改造バイクに乗っている時は木刀や金属バットを振り回して粋がっているのに、いざ捕まると何もできない自分たちを恥じるように、俺たちもあれだけの数がいればな、と一人がつぶやいた。しばらく白けた雰囲気が流れたあと、別のひとりがチャンネルを変えた。激しく踊りながら歌っている沖縄出身のアイドル歌手の映像に、夜の街頭を走って火炎瓶を投げる学生の残像が重なる。燃え上がる炎が横転した米兵の車両を包み、若い父が指笛を鳴らし、嘉手納基地のゲートに向かって走る姿が想い浮かぶ。その時代に二十歳を迎えたかった、とカツヤは思った。	104	15
231	事件とか事故も無（ねー）いらんねー困（くま）るんばーよ。	83	下 8	事件とか事故も無（ね）いらんねー困（くま）るんばーよ。	105	10
232	やりきれない気持ちのままカツヤは歩道橋を下りた。	83	下 10	やりきれない気持ちのままカツヤは歩道橋を降りた。	105	12

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
233	いかれた女の世話をするしか能のないお前が……。／何も考えるな。止めどなくあふれ、勝手に走り出しそうになる言葉をカツヤは堰き止めた。泥の臭気のように湧き出す言葉は自嘲に変わり、内部から意志と気力を腐らせる。これ以上自分を疲れさせるな。そう自らに言い聞かせ、運転に集中した。	83	下 26	いかれた女の世話をするしか能のない臆病者のお前が……。／夏の真昼の公園で狂ったように鳴いていたクマゼミの声が頭の中に響き出す。捕虫網を手に先に走っていった姉を見失い、泣きたくなるのをこらえてカツヤは探し回っていた。公園の中には古い墓がいくつもあって、その前を走って過ぎると、砂利の敷かれた小道にしゃがんでいる男の背中が見えた。短く刈り上げた金髪の髪に陽光が反射する。濃緑のＴシャツの肩のあたりで黒い髪が揺れる。男のそばに落ちた捕虫網のなかで蝉が羽を震わせている。顔を上げてカツヤを見つめる姉の目は助けを求めていた。だが、カツヤは先に進むことも、声を上げることもできなかった。振り向いた男は若い白人で、喚きながら立ち上がると、右手を激しく振った。走ってきて男が殴りかかる。そう思った瞬間、カツヤは脚の力が抜けて膝をつき、頬がひくついて涙が溢れた。男は慌ててズボンのベルトを締めると、木々の茂る公園の奥に走っていった。姉は膝まで下ろされていた下着をあげ、うずくまって声を殺して泣いた。カツヤが立ち上がって走り寄ろうとすると、来ないで、と叫んで姉はにらみつけ、それから急にカツヤの方に歩いてくると、背中に手を回して抱きしめた。／信号の赤色が滲んで広がる。カツヤは親指と人差し指で目を拭った。腐れ（くさり）アメリカー達（たー）が。誰にも言うな、と言った姉の言葉に従って封じ込めていた記憶が、今でも生々しい痛みを与えることに戸惑う。夜の砂浜に仰向けにされた少女の上に覆いかぶさり、三人の米兵が声をあげ、荒い息を吐き、交互に体を動かす。口を押さえられて涙を流し続ける少女の目が、公園でカツヤを見つめた姉の目に変わる。／何も考えるな。／止めどなく溢れ、勝手に走り出しそうになる記憶と想像をカツヤは堰き止めた。考えて何になる。これ以上自分を追い詰めるな。そう自らに言い聞かせ、運転に集中した。	106	7
234	濡れたペーパーをトイレで流し、古いタオルを濡らして床を拭いた。怒りが何度も爆発しそうになったが、弱り切って身動きもしないのを見て殴るのはやめにした。	84	上 11	濡れたペーパーをトイレで流し、タオルを濡らして床を拭いた。弱り切って身動きもしないのを見て殴るのはやめにした。	108	1
235	マユは蛇口を閉める力もないようだった。ノズルに手をあてたままぼんやりしているマユに苛立ち、カツヤは浴室に入ると代わりに閉めた。濡れた体を起こし、バスタオルで包んで手荒く拭く。	84	下 4	蛇口に目をやったままぼんやり立っているマユに苛立ち、カツヤは浴室に入るとシャワーを止めた。濡れた体をバスタオルで包んで手荒く拭く。	108	13
236	肩胛骨（けんこうこつ）	84	下 7	肩胛骨	108	15

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
237	背中の鳥はかえって生命力が甦っているようだった。	84	下 10	背中の鳥はかえって生命力が甦っているようで、	109	1
238	この女はすでに死んでいて別の生き物が寄生している。カツヤはそう思った。以前に見たビデオの一場面が思い浮かぶ。薄い胸に指先を当てると、突然皮膚が縦に裂け、粘液にまみれた巨大な昆虫のような生物が姿を現す。	84	下 14	この女はすでに死んでいて別の生き物が寄生している。そういう気がした。以前に見たビデオの一場面が思い浮ぶ。突然、背中が縦に裂け、粘液にまみれた巨大な昆虫のような生物が姿を現す。	109	4
239	膨(ふく)らみ	84	下 20	膨らみ	109	7
240	ヘヤードライヤー	85	上 3	ドライヤー	109	14
241	酔いが苛立ちや不安を拭い去ってくれるのを待った。頬の傷は大した痛みはなかったが、気になった。	85	上 9	酔いが苛立ちや不安を拭い去ってくれるのを待つ。頬の傷は大した痛みはないが気になった。	110	2
242	できる限りの注意を払わねばならなかった。	85	上 21	できる限りの注意を払わねばならない。	110	11
243	もしマユがカッターナイフを使って、カツヤから逃げきれたとしても、	85	上 26	もしマユがカッターナイフを使ってカツヤから逃げきれたとしても、	110	14
244	夏休み前には七千円になっていた。	85	下 8	夏休み前には七千円になった。	111	3
245	太腿(ふともも)	86	上 1	太腿	112	1
246	ひどいのは性器にクレゾールの原液をたらされた者もいた。	86	上 2	ひどいのは性器にクレゾールの原液をかけられた者もいた。	112	2
247	同級生から孤立する分、	86	上 12	同級生から孤立するぶん、	112	8
248	教室の中にいるよりも、	86	上 18	教室にいるよりも、	112	12
249	腹を押さえて喘ぐ同級生の頭を押さえると、膝蹴りを加える。	86	上 24	腹を押さえて喘ぐ同級生の頭を押さえると、顔に膝蹴りを加える。	113	1
250	常連客がうんざりした様子で眺めていた。	86	下 6	常連客がうんざりした様子で眺めている。	113	6
251	苛立(いらだ)ち	86	下 7	苛立ち	113	7
252	カツヤくらいの年齢で一人で座っている客は他にいなかった。	86	下 8	カツヤくらいの年齢で一人で座っている客は他にいない。	113	7
253	欠伸(あくび)	86	下 14	欠伸	113	12
254	喚(わめ)き立てる。	86	下 20	喚き立てる。	113	16
255	教師は訳知り顔に話した。	87	上 13	教師はわけ知り顔に話した。	114	12
256	術(すべ)	87	上 16	術	114	15
257	蛙	87	上 18	カエル	114	16
258	おおかた	87	上 26	大方	115	6
259	蔓(つる)	87	下 7	蔓	115	11
260	眼窩(がんか)	87	下 13	眼窩	115	15
261	かつてカツヤが想像した米兵のイメージとはかけ離れすぎていた。	87	下 21	かつてカツヤが想像した特殊部隊員のイメージとはかけ離れていた。	116	4
262	抗(あらが)い	88	上 8	抗い	116	13
263	駐車場に下りた。	88	上 18	駐車場に降りた。	117	5
264	動くのが億劫だった。タオルケットにくるまってベッドに横になり、	88	下 10	動くのが億劫だった。ベッドに横になり、	118	3
265	叱りつけても言うことを聞かなかった。	88	下 15	叱りつけても言うことを聞かない。	118	6
266	ただ、体に備わっている生きようという本能が求めたのか、	88	下 16	ただ、生きようという本能が求めたのか、	118	6
267	まわりの客たちが呆れたような声を出す。	88	下 25	まわりの客たちが呆れたように見る。	118	13

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
268	比嘉が納得してくれるか不安を抑えきれなかった。	89	上 22	比嘉が納得してくれるか不安を抑えきれない。	119	12
269	ドアを開けて店内を見渡した。	89	下 2	ドアを開けて店内を見渡す。	120	1
270	顔を上げた比嘉が、写真は？　と聞いた。	89	下 15	顔を上げた比嘉がカツヤを見た。	120	10
271	「女は？」／「アパートにいます」	90	上 3	「女は？」／比嘉の問いにカツヤの体が強張った。／「アパートにいます」	121	3
272	その公園の入口近くにある公衆電話を頻繁に利用しているらしかった。	90	下 5	その公園の入口近くにある公衆電話を頻繁に利用しているらしい。	122	9
273	三名の男	90	下 8	三人の男	122	10
274	松田の後輩でカツヤも顔だけは知っている、	91	上 13	松田の中学の後輩でカツヤも顔と名前だけは知っている、	124	1
275	暗くて中の様子が確認できなかったが、	91	下 13	暗くて車内の様子は確認できなかったが、	125	3
276	喚（わめ）き	92	上 14	喚き	126	8
277	鳶職（とびしょく）	92	上 15	鳶職	126	9
278	呻（うめ）いて	92	上 22	呻いて	126	13
279	掌底（しょうてい）	92	下 1	掌底	127	1
280	上顎（うわあご）	92	下 2	上顎	127	1
281	弄（もてあそ）んだ	92	下 23	弄んだ	127	16
282	少女たちに下りるように言う。	93	下 4	少女たちに降りるように言う。	129	9
283	比嘉が下りるのを待って車の鍵を閉め、	93	下 8	比嘉が降りるのを持って車の鍵を閉め、	129	11
284	指を二本立てて合図した。	93	下 11	親指を立てて合図した。	129	14
285	鬱陶（うっとう）しさ	93	下 25	鬱陶しさ	130	7
286	煉瓦色のカーペットが敷かれていた。	94	上 1	煉瓦色のカーペットが敷かれている。	130	9
287	二人の間に腰を下ろした。	94	上 4	二人の間に腰を下ろす。	130	11
288	品定めするように少女たちを見ていた。	94	上 4	品定めするように少女たちを見た。	130	11
289	食事やつまみを持ってくるよう指示する。	94	上 7	ピザを店に注文するよう指示する。	130	13
290	席に戻りグラスを少女たちの前に置いた。	94	上 14	席に戻り、グラスを少女たちの前に置く。	131	2
291	喘（あえ）ぎ	94	下 3	喘ぎ	131	13
292	下卑（げび）た	94	下 9	下卑た	132	1
293	指で耳たぶをいじった。	94	下 13	指で耳たぶをいじる。	132	4
294	持てよ、バカが。	94	下 23	持てよ、バカ。	132	11
295	腿（もも）	94	下 25	腿	132	13
296	喉（のど）	95	下 11	喉	134	8
297	比嘉に押さえられた右手が小刻みに震えて、血がテーブルに飛び散る。	95	下 13	比嘉に押さえられた右手が小刻みに震えて、指先に盛り上がった血がテーブルに流れ落ちる。	134	9
298	小柄な少女	95	下 19	少女	134	14
299	テーブルの上に広げられた細く長い指は、人差し指の先から流れる血とマニキュアの赤で飾られている。	96	上 8	テーブルの上に広げられた細く長い指は、血とマニキュアの赤で飾られている。	135	8
300	テレビから流れる女の喘ぎ声と重なって響く。	96	下 2	テレビから流れる女の喘ぎ声を一瞬かき消す。	136	7
301	口元に当てるグラスが、震えて歯に当たり音を立てる。	96	下 22	口元に当てるグラスが震えて歯に当たり音を立てる。	137	5
302	ピザには手をつけなかった。	97	上 15	ピザには手を伸ばさない。	138	3
303	カツヤが声を上げた。	97	上 23	カツヤは声を上げた。	138	9

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
304	ソファから腰を上げた。	97	上 24	ソファから腰を上げる。	138	10
305	小柄な少女を見てすぐに顔を伏せた。	97	下 2	小柄な少女を見てすぐに顔を伏せる。	138	12
306	まだためらっていた。	97	下 6	まだためらっている。	138	15
307	少女の側はどうしようもなかった。	97	下 26	少女にはどうしようもない。	139	14
308	嫌悪と屈辱で顔を歪めた最初のものが一番人気があった。	98	上 5	嫌悪と恐怖と屈辱で顔を歪めた最初のものが一番人気があった。	140	2
309	疾(やま)しさ	98	上 11	疾しさ	140	5
310	ウイスキーのグラスを取って飲みながら松田が聞いた。	98	下 9	ウイスキーのグラスを取って飲みながら松田が聞く。	141	7
311	瞼(まぶた)	98	下 26	瞼	142	4
312	それからソファに座って携帯電話を手にすると、	99	上 3	それからソファに座って携帯電話を手にし、	142	5
313	酷(ひど)かった	99	下 2	酷かった	143	8
314	ホテルに残った二人の少女のことが思い浮んだ。	99	下 7	ホテルに残った二人の少女のことが思い浮ぶ。	143	11
315	生き延びた仲間も次々と戦死し、	100	上 5	生き延びた仲間もその後の戦闘で次々と戦死し、	144	13
316	緋色の顔に漆黒の目が打たれ、	100	上 25	金色の色彩と漆黒の瞳孔が打たれ、	145	11
317	嘴(くちばし)	100	上 25	嘴	145	11
318	特殊部隊の兵隊だって本当は戦場で死にたくないから、	100	下 12	特殊部隊の兵隊だって本当は戦場で死にたくないからで、	146	4
319	深い青緑色の池に出る。頭上に警察と州兵のヘリの音が近づく。	100	下 25	深い青緑色の湖に出る。そこは生きのこった戦友たちと一度だけ集まり、釣りとキャンプをした湖畔だった。頭上に警察と州兵のヘリの音が近づく。	146	12
320	池の水面が波打ち、	100	下 26	湖面が波打ち、	146	16
321	紙袋にウイスキーの瓶を入れた浮浪者が一口飲んで、死んだ男のために涙を流す。	101	上 12	くしゃくしゃの紙袋にウイスキーの瓶を入れた浮浪者が画面を見つめ、一口あおって死んだ男のために涙を流す。	147	6
322	マユは目を閉じたまま二口ほど飲んだ。	101	下 7	マユは目を閉じたまま二口飲んだ。	148	6
323	洗濯物を取り入れて整理すると、部屋を出た。	102	上 13	洗濯物を取り入れて整理してから、部屋を出た。	149	11
324	途中で食事をしてから遊技場に戻り、	102	上 14	途中で食事をして遊技場に戻り、	149	11
325	シーツを敷いて寝かせたベッドの上で、	102	上 19	新しいシーツに替えて寝かせたベッドの上で、	149	15
326	翌日は十時の開店前に遊技場に行き、	102	上 26	翌日、カツヤは十時の開店前に遊技場に行き、	150	6
327	意識の芯を折らなければ、	102	上 5	意識の芯をぶよぶよにしなければ	150	9
328	何度も口をすすぎ、	102	下 10	口をすすぎ、	150	12
329	嘔吐(おうと)	102	下 12	嘔吐	150	13
330	前の晩からずっと時間が止まっていたような感じがした。	102	下 13	前の晩からずっと時間がとまっているような感じがした。	150	15
331	ヤンバルの森を空中撮影した映像が画面一杯に映った。	103	上 5	ヤンバルの森を空中撮影した映像が画面一杯に映る。	151	11
332	和(なご)やか	103	下 7	和やか	152	15
333	下りよう、	103	下 8	降りよう、	152	16
334	下りる、	103	下 16	降りる、	153	6
335	教師からこんなに話しかけられたのは初めてだった。	103	下 17	教師からこんなに話しかけられたのは久し振りだった。	153	7

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
336	くにがみそん 国頭 村	104	上 18	国頭村	154	11
337	けいれん 痙攣	105	下 4	痙攣	157	8
338	うと 疎ましくて	106	上 16	疎ましくて	159	2
339	カツヤはいっさい反抗しないで、	106	下 26	カツヤは反抗しないで、	160	11
340	えのかわ 栄野川	107	上 10	栄野川	161	3
341	車から下りた。	107	下 1	車から降りた。	161	15
342	幹を布で包まれた木もわずかな緑しかない。	107	下 9	幹を布で保護された木はわずかな緑しかない。	162	3
343	それぞれ自分の店や会社のことに追われていた。	108	下 10	それぞれ自分の会社や店のことに追われていた。	164	9
344	あざわら 嘲笑 う	108	下 14	嘲笑う	165	4
345	ベッドから下りた。	109	上 1	ベッドから降りた。	165	6
346	部屋を出て、マユの部屋に行きベッドのそばに膝をついた。	109	上 2	マユの部屋に行きベッドのそばに膝をついた。	165	7
347	けんこうこつ 肩胛骨	109	上 4	肩胛骨	165	8
348	静かに戸を閉めた。	109	上 16	静かに戸を閉める。	165	16
349	隊員たちは同じ幻覚に襲われる。それは地球に生物が誕生して以来	109	上 26	隊員たちは同じ幻覚に襲われる。／それは地球に生物が誕生して以来	166	8
350	さつりく 殺戮	109	下 1	殺戮	166	9
351	隊員たちはいくつもの地域や時代の兵士、	109	下 2	隊員たちはいくつもの地域や時代を、兵士として、	166	10
352	果てしない戦いの中に巻き込まれる。槍や斧で戦う数百年前の戦争だったり、数万年前の狩猟であったり、数千万年前の別の生物としての生存競争だったり、時代と場所が目まぐるしく変化し、	109	下 3	果てしなく戦い続けていく。槍や斧で戦う数百年前の戦争のあと数万年前の狩猟の場面に変わり、いつの間にか数千万年前の別の生物としての生存競争に巻き込まれている。時代と場所が目まぐるしく変化し、	166	10
353	すでに眠りに落ちていて夢を見ているようでもあった。	109	下 11	すでに眠りに落ちていて夢を見ているようでもある。	166	16
354	はちゅうるい 爬虫類	109	下 17	爬虫類	167	4
355	目まぐるしく色を変える空を飛ぶ巨大な鳥が、ホタルの群のように光を放つ巨大なクラゲを引き裂く。	109	下 21	目まぐるしく色を変える空を巨大な鳥が飛び、ホタルの群のように光を放つ巨大なクラゲを嘴と爪が引き裂く。	167	7
356	まぶた 瞼	110	上 18	瞼	168	8
357	もも 腿	110	上 19	腿	168	8
358	十時	110	上 25	十一時	168	15
359	ひど 酷 く	110	上 25	酷く	168	15
360	ベッドから下り、	110	上 26	ベッドから降り、	168	14
361	カップに注いで部屋に運んだ。	110	下 9	カップに注いで部屋に運ぶ。	169	5
362	マユはゆっくりと牛乳を飲み干した。	110	下 16	マユは五分程かかって牛乳を飲み干した。	169	9
363	桜色になった背中に鳥の色が鮮やかに浮き上がる。長い尾がゆるやかに弧を描いて腰まで伸びている。緑色のカーテンが光を透かして揺れるたびに、鳥の色も微妙に変化する。	110	下 19	桜色になった背中に鳥の色が浮き上がる。長い尾がゆるやかに弧を描き、腰や脇腹に光の粉が輝きだす。緑色のカーテンが揺れるたびに、鳥の色も微妙に変化する。	169	12

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
364	今日までは部屋で寝かせようと思い、マユをベッドに横たえた。	111	上 4	今日までは部屋で寝かせよう、と思いマユをベッドに横たえた。	170	3
365	一日ぼんやり海を眺めていたかった。車に乗り込み、	111	上 9	一日ぼんやり海を眺めていたかった。腕時計を見ると十二時半を回っている。カツヤは車に乗り込み、	170	6
366	陽炎（かげろう）	111	上 13	陽炎	170	10
367	真栄原（まえはら）	111	上 18	真栄原	170	13
368	宜野湾市に向かうバイパスに出た。	111	上 19	宜野湾市に向かうバイパスに出る。	170	13
369	一時半頃	111	上 19	二時前	170	14
370	「アメリカ兵に暴行された小学生がいたでしょう。あれの抗議集会さ」／ああ、あれか……。／前に店に来たときに見たデモのことを思いだした。	111	下 5	「アメリカ兵に暴行された小学生がいたでしょう。あれの抗議集会さ」／前に店に来たときに見たデモのことを思いだした。	171	7
371	仁美は短大を出てから、	112	上 8	仁美は短大を出たあと、	172	11
372	マサトが生まれて今は主婦業に専念していた。	112	上 11	マサトが生まれて今は主婦業に専念している。	172	13
373	小学校で教えていた仁美にとって、事件が与えた衝撃の大きさは、カツヤの比ではないはずだった。思いつめたような表情でテレビを見ている仁美に、久代が皮肉っぽい口調で言った。	112	上 15	小学校で教えていた仁美にとって、事件が与えた衝撃の大きさは、カツヤの比ではないはずだった。それだけではなく……、公園でうずくまって泣いていた小学生の姉の姿が脳裏に浮かんだ瞬間、カツヤは記憶を断ち切った。気づかれないように静かに息を吸って、吐き、カウンターの上に置いた自分の手を見つめる。思いつめたような表情でテレビを見ている仁美に、久代が皮肉っぽい口調で言った。	173	1
374	アイスコーヒーを手にしたカツヤの横顔を、仁美はじっと見つめている。	112	下 20	アイスコーヒーを手にしたカツヤの横顔を仁美は見つめている。	174	10
375	授業料と生活費は全てアルバイトでまかなっていた。	112	下 25	授業料と生活費は全て奨学金とアルバイトでまかなっていた。	174	13
376	守礼門に似た入口の前でハンドマイクで訴える声が聞こえている。テレビを見ながらカツヤは時間が気になった。これだけの人が集会が終わって帰ると、今度は逆方向に大渋滞になるはずだった。／久代がカレーライスとアイスコーヒーのお代わりを持ってきた。	114	上 15	守礼門に似た入口の前でハンドマイクで訴える声が聞こえている。／テレビを見ながらカツヤは時間が気になった。これだけの人が集会が終わって帰ると、今度は逆方向に大渋滞になるはずだった。そのことへの焦りに加えて、口にすることはなくても、姉もあの公園での出来事を思い出しているに違いないと考えると落ち着かなかった。頬の傷について何も言わないのも、かえって気になった。久代がカレーライスとアイスコーヒーのお代わりを持ってきた。	175	9
377	その男が何か重要な話をしているのだろうと思ったが、カツヤは意味を聞き取る余裕がなかった。	114	下 5	その男が何か重要な話をしているのだろうと思ったが、意味を聞き取る余裕がなかった。	176	7
378	苛立（いらだ）たせた	115	上 10	苛立たせた	177	12
379	だけど（やしが）、	116	上 2	だけど、	179	11
380	久代にはそういう皮肉を言うのが精一杯だった。カウンターから出ると、出口に向かって歩きながらカツヤに声をかける。	116	上 5	久代はそう言い捨ててカウンターの下からハンドバックを取って、出口に向かって歩きながらカツヤに声をかける。	179	13
381	姉が大学に合格したことがカツヤには自分のことのように嬉しかった。	116	上 25	姉が大学に合格したことが、カツヤには自分のことのように嬉しかった。	180	11

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
382	物心ついたときからいつも自分のそばにいて守ってくれた姉のことを、カツヤは家族の中で誰よりも信頼していた。小学校の頃は、姉のためならなんでもできると、子ども心に思った。／それだけに、中学に入って体験していることを、姉には知られたくなかった。	116	上 26	物心ついたときからいつも自分のそばにいて、守ってくれた姉のことを、カツヤは家族の中で誰よりも信頼していた。／それだけに、中学に入って体験していることを、姉には知られたくなかった。	180	12
383	集会の帰りの渋滞に巻き込まれないか、と懸念したが、	117	下 6	集会の帰りの渋滞に巻き込まれないかと懸念したが、	183	10
384	木麻黄（もくまおう）	117	下 20	木麻黄	184	3
385	その木陰は品物の売り買いだけでなく、世間話をする村人たちでいつも賑わっていたという。	117	下 22	その木陰は品物の売り買いや世間話をする村人たちでいつも賑わっていたという。	184	5
386	泉（かー）	117	下 26	泉	184	7
387	神歌（かみうた）	118	上 1	神歌	184	8
388	戦後の沖縄を生きた人々、	118	上 7	戦後の沖縄を生きた村の人々、	184	12
389	いや、渋滞はいずれ終わる。しかし、目の前の基地が無くなることは、カツヤには想像できなかった。抜け出すことも、進むこともできない泥沼にはまり込んでいるようなものだった。	118	上 10	いや、渋滞はいずれ終わる。しかし、目の前の基地が無くなることも、自分が陥っている状況から抜け出すことも、カツヤには想像できなかった。	184	15
390	太腿（ふともも）	118	上 17	太腿	185	2
391	漁り（あさ）	118	上 21	漁り	185	6
392	そういう姿しか思い浮ばなかった。／集会に何万人集まったといっても、小学生が強姦されて、一時的に気持ちが昂ぶっているだけで、どうせ長くはもたんさ、とカツヤは思った。今目の前にある基地を脅かす行動をとる奴など一人もいやしない。／集会やデモが大規模に起こって困るどころか、むしろ喜んでいる父の顔が浮かぶ。反対運動が盛り上がらないと、軍用地料も上がらないし、政府の補助金も増えない。	118	上 21	そういう姿しか思い浮ばなかった。／反対運動が盛り上がらないと、軍用地料も上がらないし、政府の補助金も増えない。	185	6

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
393	カツヤはつぶやいた。長い坂道を下り、五八号線に出ても車は遅々として進まなかった。	118	下 7	カツヤはつぶやいた。米兵達の後方にあるガジマルの木に目をやったとき、木の下にうずくまって両手で顔を押さえている少女の姿が見えた。目を閉じると、耳の奥でクマゼミの声が反響し、首筋を灼く陽の熱がよみがえる。振り向いた白人の若者が、喚きながらズボンのベルトを締める直前、透明な糸が光る肉塊が見えた。カツヤを抱きしめていた腕の力が抜け、姉は四つん這いになって嘔吐した。口の中のものを何度も地面に吐き捨て、声を出さずに泣き続けた。／カツヤは目を開けて運転席の窓ガラスを降ろし、改めて基地を見た。ガジマルの木の下に少女の姿はない。金網の向こうに立つ二人の米兵の一人が、カツヤを指さして笑い、隣の米兵に話かける。その米兵の腰のホルダーから拳銃を奪い、二人に突きつける自分の姿を思い描く。後ろから数台の車にクラクションを鳴らされ、前を見ると大きな空きができている。発信する前、カツヤは米兵たちに中指を突き立て、人差し指で首を切る仕草をして見せた。カツヤにできたのはそれだけだった。／長い坂道を下り五八号線に出ると、車はますます進まなくなった。	185	10
394	集会が終わるには時間が早いのではないかと思ったが、渋滞はすでに何キロも続いていた。浦添市の城間まで来たとき、時計は五時十五分前になっていた。	118	下 8	集会が終わるには時間が早いのではないかと思ったが、視線が届く限り渋滞は続いている。何も考えず、何も感じないように、ただぼんやりと外を眺め、時々アクセルを踏む。そうやって、叫びながら車から飛び出したくなる気持ちを抑えた。／浦添市の城間まで来たとき、時計は五時十五分前になっていた。	186	5
395	車の中で大声で叫び、何とか気を静めようとしているときに、助手席に放ってあった携帯電話が鳴った。	118	下 13	とうてい間に合うはずがなく、こらえきれずにデタラメな歌を大声で歌い、何とか気を静めようとしているときに、助手席に放っておいた携帯電話が鳴った。	186	11
396	カツヤは冷房を弱めた。金網の内側に咲く夾竹桃が逆光で影になり、	119	上 2	カツヤは冷房を弱めた。基地の金網の内側に咲く夾竹桃が逆光で影になり、	187	6
397	時間は、五時十五分になろうとしていた。	119	上 9	時計は五時十五分になっている。	187	10
398	数日前に公園から電話をかけていた小柄な少女だった。	119	上 17	数日前に公園で電話をかけていた小柄な少女だった。	187	16
399	少女はカツヤを見ると小馬鹿にしたような笑いを浮かべた。	119	上 18	少女はカツヤを見ると小馬鹿にしたような笑いを浮かべる。	187	16
400	怯（おび）え	119	上 20	怯え	188	1
401	術（すべ）	119	上 23	術	188	4
402	コーラ缶を受け取り、同じように吸う。かなり馴れた仕草だった。	119	下 16	コーラ缶を受け取り、同じように吸う。馴れた仕草だった。	189	2
403	ちゃんと意味をなしているか自信がなかった。	119	下 22	ちゃんと意味をなしているか自信がない。	189	7

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
404	自分の体とは別のどこかから発せられているようで、自分が今、比嘉の前で話しているという実感がなかった。	119	下 23	自分の体とは別のどこかから発せられているようで、比嘉の前で話しているという実感がなかった。	189	7
405	こと 異なった	120	下 2	異なった	190	12
406	その事実にカツヤは、自分でも戸惑うほどの怒りとやりきれなさを覚えた。	120	下 4	その事実がやりきれなかった。	190	4
407	のど 喉	120	下 19	喉	191	10
408	ふく 膨れ	120	下 20	膨れ	191	10
409	ろう 蠟色	120	下 20	蠟色	191	10
410	まぶた 瞼	120	下 21	瞼	191	11
411	眼球が飛び出し、	120	下 21	眼球が半分飛びだし	191	11
412	自分が目にしたことが信じられず、	120	下 24	自分が目にしたものが信じられず、	191	13
413	けお 気圧された	122	上 17	気圧された	195	2
414	もてあそ 弄　ぶ	122	上 26	弄ぶ	195	9
415	うめ 呻き	122	下 14	呻き	196	3
416	みぞおち 鳩尾	123	上 14	鳩尾	197	4
417	カツヤはまともに突きを受けて、前にかがんだ体をすぐに起こした。	123	上 14	カツヤはまともに突きを受けて前にかがんだ体をすぐに起こした。	197	4
418	カツヤは必死になって性器を刺激し続けた。	123	下 14	カツヤは激しく手を動かし性器を刺激し続けた。	198	6
419	上着のポケットをまさぐり、	124	上 25	ズボンのポケットをまさぐり、	199	15
420	髪や上着に液体がきらめきながら降りかかる。	124	下 6	髪や衣服に液体がきらめきながら降りかかる。	200	4
421	炎に包まれて比嘉の体が仰向けのままずり落ちる。	124	下 14	炎に包まれた比嘉の体が仰向けにずり落ちる。	200	9
422	まつげ 睫毛	124	下 20	睫毛	200	13
423	あえ 喘いだ	125	上 6	喘いだ	201	5
424	縁に引っかかった比嘉の足が虫のように見えた。	125	上 12	縁に引っかかった比嘉の足が虫のように見える。	201	10
425	カツヤは四つん這いになったままのマユを残し、	125	上 14	カツヤは四つん這いになってうなだれたままのマユを残し、	201	11
426	夾竹桃の花の色をした脳の一部が見えている。浜辺に打ち上げられた海藻のような臭いが部屋中に立ちこめている。	125	上 22	夾竹桃の花の色をした脳の一部が見えている。枕元に血のついたビデオカメラが転がり、浜辺に打ち上げられた海藻のような臭いが部屋中に立ちこめている。	201	16
427	ちつ 膣	125	下 3	膣	202	6
428	けいれん 痙攣	125	下 7	痙攣	202	9
429	蛇口から比嘉の顔に降り注いでいた。	125	下 18	蛇口から比嘉の顔に降り注いでいる。	202	16
430	立ち昇る湯気の中に血の臭いが混じって、	125	下 20	立ち昇る湯気の中に血の臭いが混じり、	203	1
431	ソファに座ったままマユは、カツヤの声に従って体を動かし、	126	上 8	ソファに座ったままマユはカツヤの声に従って体を動かし、	203	11
432	カツヤは自分の体を拭いた。痛みをこらえて下着とジーンズをはき、T シャツを着た。	126	上 11	カツヤは自分の体を拭いた。性器から滲む血でバスタオルが汚れた。痛みをこらえて下着とジーンズをはき、T シャツを着た。	203	13

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
433	赤錆色（あかさびいろ）	126	上 16	赤錆色	203	16
434	脆（もろ）い	126	上 22	脆い	204	4
435	目を引いた。	126	上 25	目を引く。	204	6
436	抗（あらが）って	126	下 4	抗って	204	10
437	マユを助手席に乗せる。急いで運転席に乗り込み、駐車場から車を出した。左にハンドルを切ったとき、出口横の壁に後ろのバンパーをこすった。	126	下 13	マユを助手席に乗せると急いで運転席に乗り込み車を出した。駐車場の出口で左にハンドルを切ったとき、横の壁に後ろのバンパーをこすった。	204	15
438	時計は七時二十一分を指している。	126	下 15	時計は七時二十一分を表示していた。	205	1
439	外はすっかり暗くなっていた。	126	下 16	外は暗くなっていて、	205	1
440	作り物めいて、	126	下 17	作り物めき、	205	2
441	ホテルから警察に通報が行って緊急配備が敷かれているのだろうか、と思った。	127	上 15	ホテルから警察に通報が行って緊急配備が敷かれる。いや、すでに敷かれているかもしれない。そう考えると気が急ぐが、前が詰まって追い越す機会がない。	206	4
442	消えていった青紫色の火が、	127	上 20	消えていた火が、	206	9
443	電話したかもしれなかった。	127	上 24	電話したかもしれない。	206	12
444	助手席側に回ってマユを下した。車に一人で残しておけなかった。マユは蒼白な顔色で目も虚ろだったが、	127	下 5	助手席側に回ってマユを降ろした。マユは蒼白な顔色で目も虚ろだったが、	207	1
445	濁声（だみごえ）	127	下 18	濁声	207	10
446	アキ兄（にー）	128	上 10	アキ兄	208	7
447	怯（おび）え	128	上 13	怯え	208	9
448	三十歳をとうに越したように見える。	128	上 16	三十歳をとうに越しているように見える。	208	12
449	と思いながら、	128	下 16	と思いつつ、	209	14
450	蔑（さげす）んで	129	上 8	蔑んで	210	13
451	そう思いながらカツヤは、立ち止まって振り返った。	129	上 15	カツヤは立ち止まって振り返った。	211	2
452	兄たちは車も共用していた。	130	上 5	兄たちは車も共用していて、	211	13
453	膨（ふく）れ	130	下 8	膨れ	213	1
454	アクセルを踏み込みながら	130	下 13	アクセルを踏み直しながら、	213	11
455	読谷村（よみたんそん）	131	上 16	読谷村	214	9
456	嘲（あざけ）り	131	上 19	嘲り	214	11
457	恩納村（おんなそん）	131	上 26	恩納村	214	16
458	夜気は冷えて澄んでいた。	131	下 24	夜気は冷えて澄んでいる。	215	16
459	米軍演習場の中に入ることは、	131	下 26	米軍演習場の中に入るのは、	216	2
460	偽りでもよかった。	132	上 14	偽りでもいい。	216	10
461	麦藁色（むぎわらいろ）	132	上 26	麦藁色	217	3
462	瑞々（みずみず）しい	133	上 1	瑞々しい	218	6
463	感触があった。	133	上 1	感触がある。	218	6
464	夢中になっていて、	133	上 8	夢中で、	218	11
465	和（なご）む	133	上 11	和む	218	13
466	少女の顔は見えなかった。	133	上 22	少女の顔は見えない。	219	4
467	眩（まばゆ）い	133	下 7	眩い	219	12

No.	初出（2004 年）	頁	行	単行本（2006 年）	頁	行
468	嘴（くちばし）	133	下 15	嘴	220	1
469	肩胛骨（けんこうこつ）	133	下 17	肩胛骨	220	3

Abstract

The research in this manuscript investigated the differences between the Initial Edition and First Edition of Nijinotori by Shun Medoruma. The result shows that there were many differences between the Initial Edition published in Novel Tripper 2004 (Winter, Asahi-Shimbunsha) and First Edition Nijinotori in 2007 (Kage-shobou). The amount of differences totalled 469 passages, and most of them were the deletion of kanas　which is relative to the different readers of the Initial Edition and First Edition, or small corrections. However, there are two very important points that needs to be addressed; the addition of a scene that older sister Hitomi is raped by an American soldier, and the portrayal of resemblances among Hitomi, Mayu and the victim of girl assault in 1995. These can be reflected upon the rebuttal against the point that implicates Hitomi portrayed as 'human-hearted' in a change of Medoruma's ideas, which was referred in book reviews of the Initial Edition. Namely, such a critic without much thought that gives all hopes to Hitomi who maintains her 'humanity' is refused by the addition of Hitomi's rape scene.

（受付日：2012 年 5 月 4 日，受理日：2012 年 6 月 22 日）

銘苅　純一（めかる　じゅんいち）
現職：大妻女子大学人間生活文化研究所研究員

修士（文学）沖縄国際大学.
専門は沖縄近現代文学．現在は目取真俊や大城立裕など，男性作家のポジショナリティに着目した米軍による性暴力被害の語りについて研究を行っている．
主な論文：「滅びゆく琉球女の手記」の受容をめぐる一考察——京浜沖縄県学生会の実態調査を中心に（単著，地域文化論叢，第 9 号）